保田式
手型

盛花餅華實現挿法 上

附もりもの（飾菓法）配置法基本

近衛尊覺尼公題歌

藤澤南岳題字

坂田習軒拔文

不識庵 保田露人著

保田式手型

盛花瓶華實現挿法 上卷

附もりもの(飾菓法)配置法基本

文進堂藏版

自然

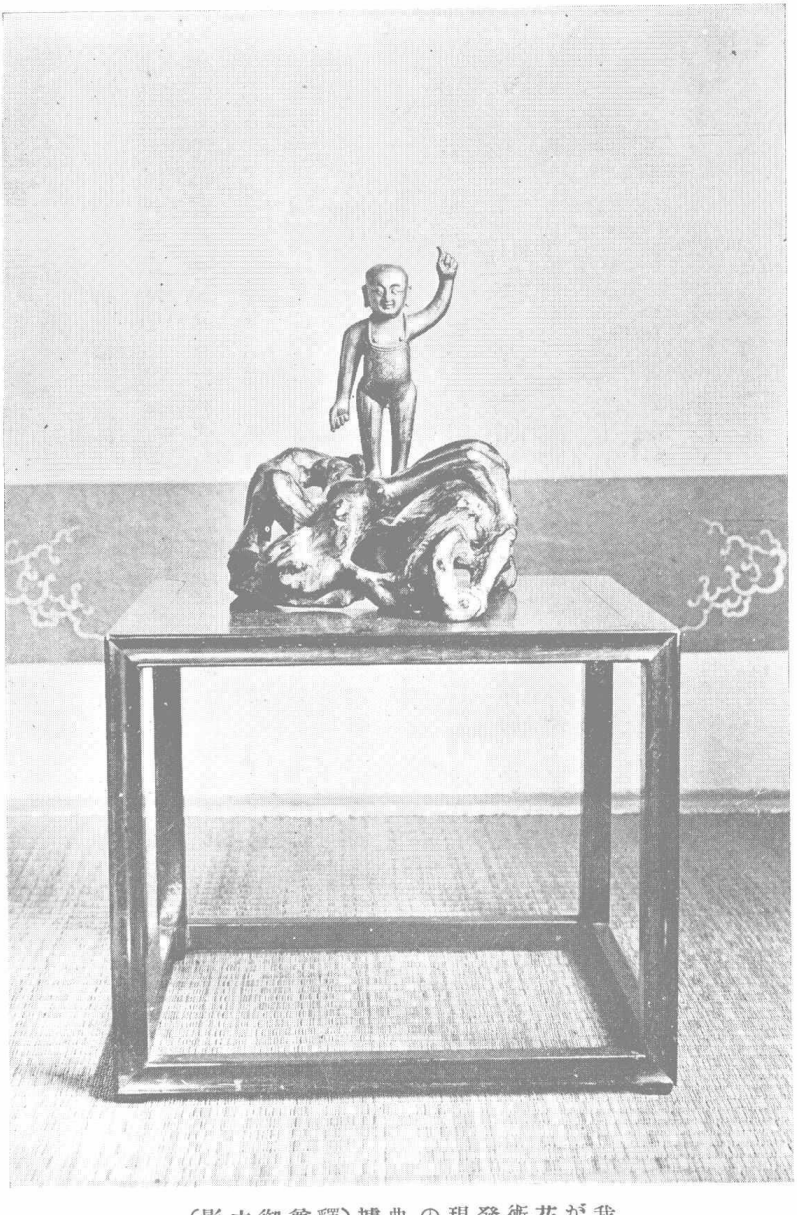
美
於壽為
吉兆

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

みなもとの
重之朝臣
歌合

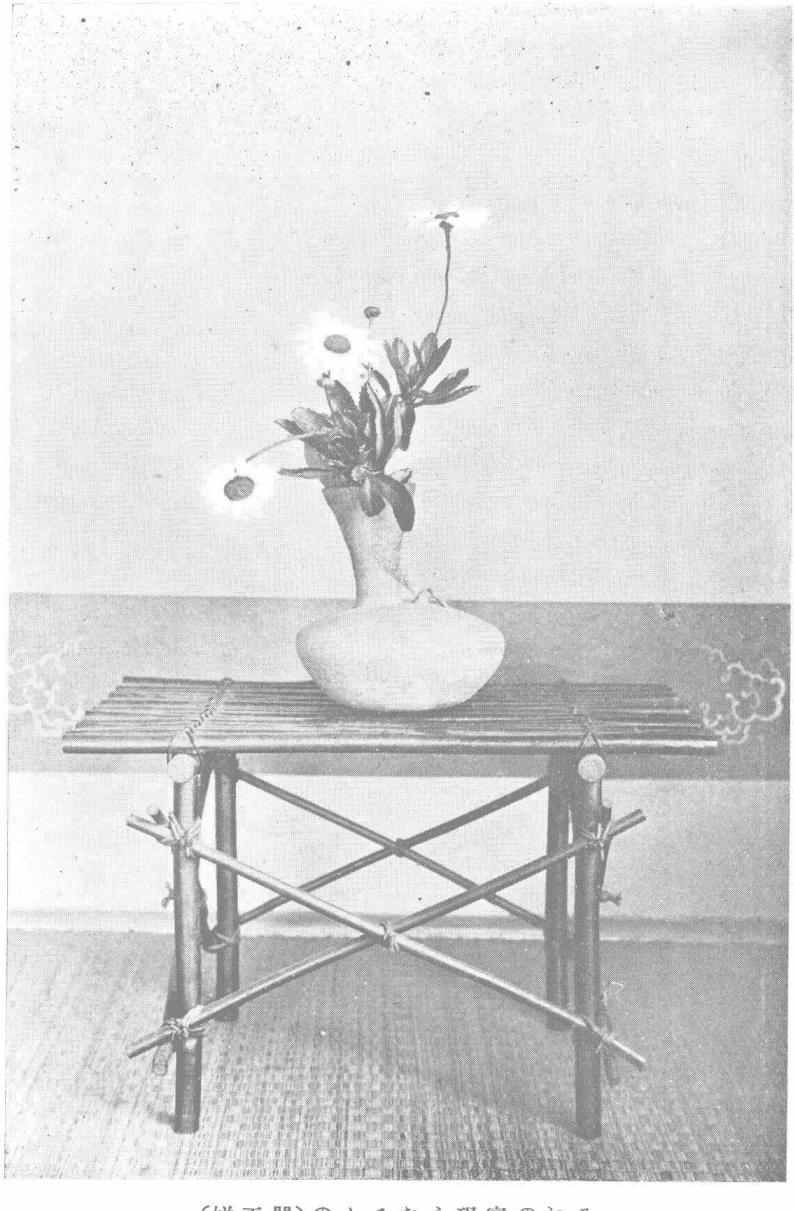
手型挿花法發現の濫觴

天地に盈虛あり萬物に消長ありて宇宙現象は無限に集合離散するも必ず原因結果の法則ありて秩序整然一絲亂れざるなり。之れを草木の發生に見るも亦た眞行草を具備して成育繁茂すべきなり。即ち發生の當時は、「眞」の姿勢にして、一枝一葉を生じたるは「行」の姿勢を顯はし風雨霜雪を凌ぎ如何なる障害も耐へて其の生命欲を發揮したるの狀態は豈に「草」の姿勢にあらずや。即ち「眞」は立つが如く、「行」は行くが如く、「草」は走るが如しと言へり。是の如く生存競爭場裡枝葉繁茂を敢へてするには必ず其の盤根に於ても地軸を穿つ底の鞏固無きを得ざるなり。即ち木の長きを求むる者は其の根を固くすと言へり。古來易道に於ては之れを陰陽と說けり即ち盤根は陰にして枝葉は陽なり此の陰陽和合に待たざれば萬物は遂に發生するを得ざるなり。畏れ多くも神代の頸飾なる玉、管、曲玉は陰陽和合上下一致の象徵に外ならず、故に我が皇室の大禮には古典に則りて多く龜分を用ひ給ひて專ら和合の聖旨を明らかにし給へり。茲に於て著者も亦た此の宇宙現象の法則に鑑みて徒らに荒唐無稽の言辭を弄して後進を誘掖するの非を悟り我か挿花法の發表は際して最も簡明にして而も深遠なる基礎の確立に一意專心凝念工夫すること頗ぶる多年、遂に至誠の徹する



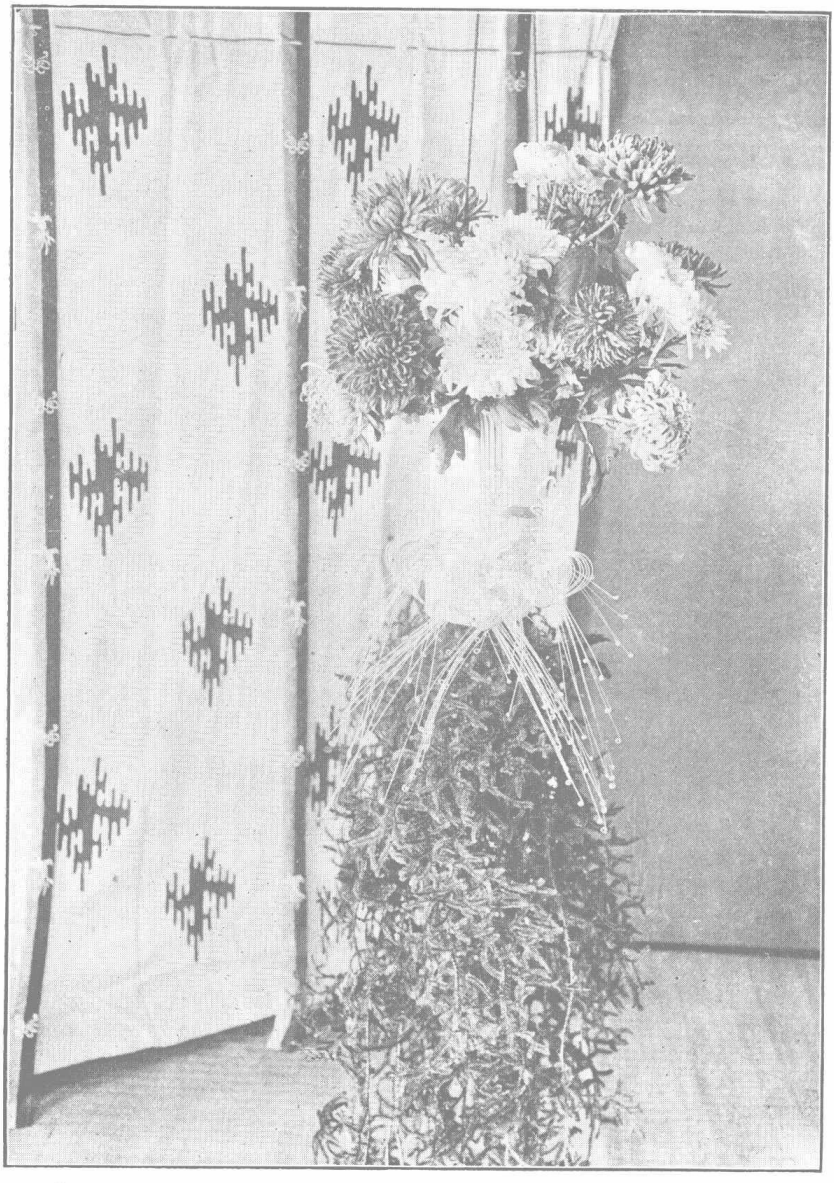
我が花術發現の典據(釋尊御立影)

池の坊流花濫觴(露人考)



それの實現したるもの(器平鉾)

所にや、一夜唯だ此の事のみを思念して臥したるに、急然として一道の光明に接するの刹那釋尊降誕の天上天下唯我獨尊の聖容を髣髴として感得するを得たり。時恰も我が身は臥しながらにして左手の人指し指を擧げて天を指すの姿勢をなせり。覺えず奇異の感に打たれたるも、是れなん日頃著者の求むる道を示し玉へるならんかと恰も逃ぐる者の袖を捉へるが如くにして、聖容に對して、流儀花の「眞」の型は如何に「行」の型は如何に。「草」の型は如何にと問へば尊容生けるが如く微笑し玉ひて「善哉我が指頭を見よ」と答へ玉ふ。次ぎに池の坊の型は如何に、瓶花は如何に、最後に浮草の配置は如何にと問ふに悉く暗示を得て素顏成就を冥想の裡に念誦しつゝ右手人指し指を以て直立左手人指指の指頭を眞位と點呼し次に中間傾斜せる拇指を行位、屈曲せる丈高指の第二關節部を「懷」、無名指（紅差指を）「谷」、小指を草位（此の小指と紅指との間に上下を正しく椿の如きものゝ葉を「懷」に對照して挾むときは自然と流儀の花の「行」の花體を得べし）と順次に會得し合掌釋尊に感謝したるなり。折りから東天紅を呈し多年疑雲廓然として晴れ、歡喜胸中に溢れ、空前の我が手型法の基礎を確立することを得たり。其れより六年を經て漸く保田式手型投入盛花實現挿法の公刊の緒に就き今や其の第四版を發行するに當りて嗚呼しくも著者の苦心を述べて冠頭に題すること乃ち爾り。



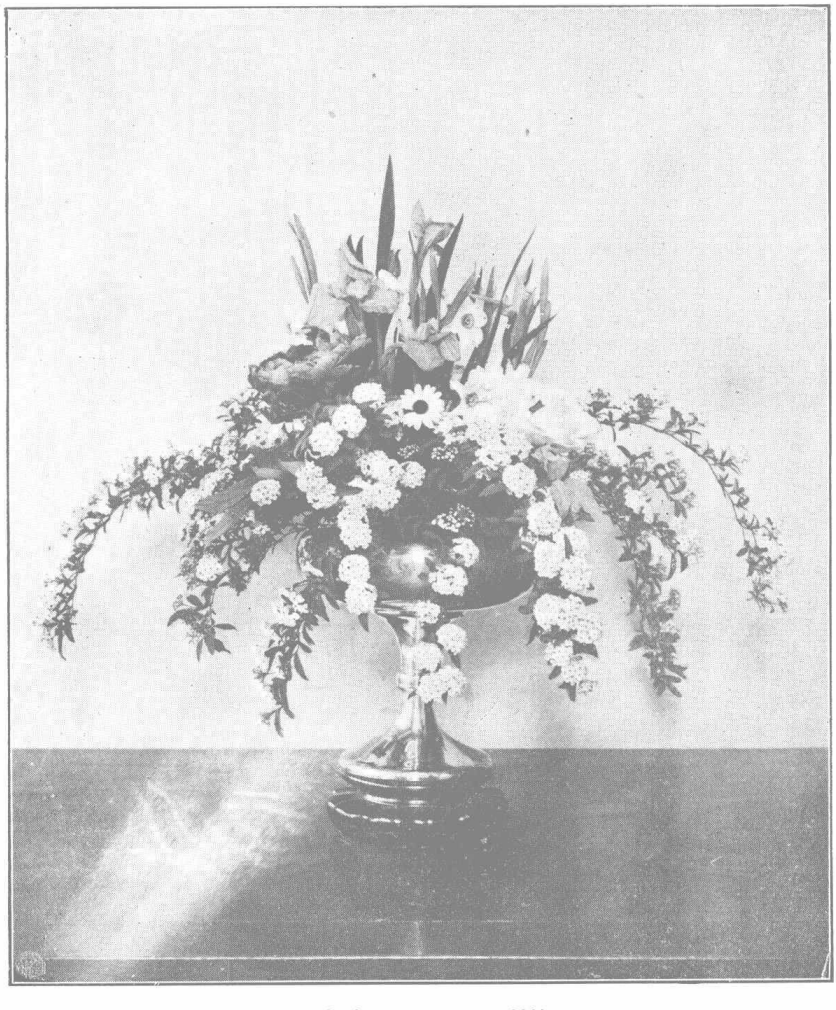
(匠意桐菊)　　束花用飾床儀婚

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

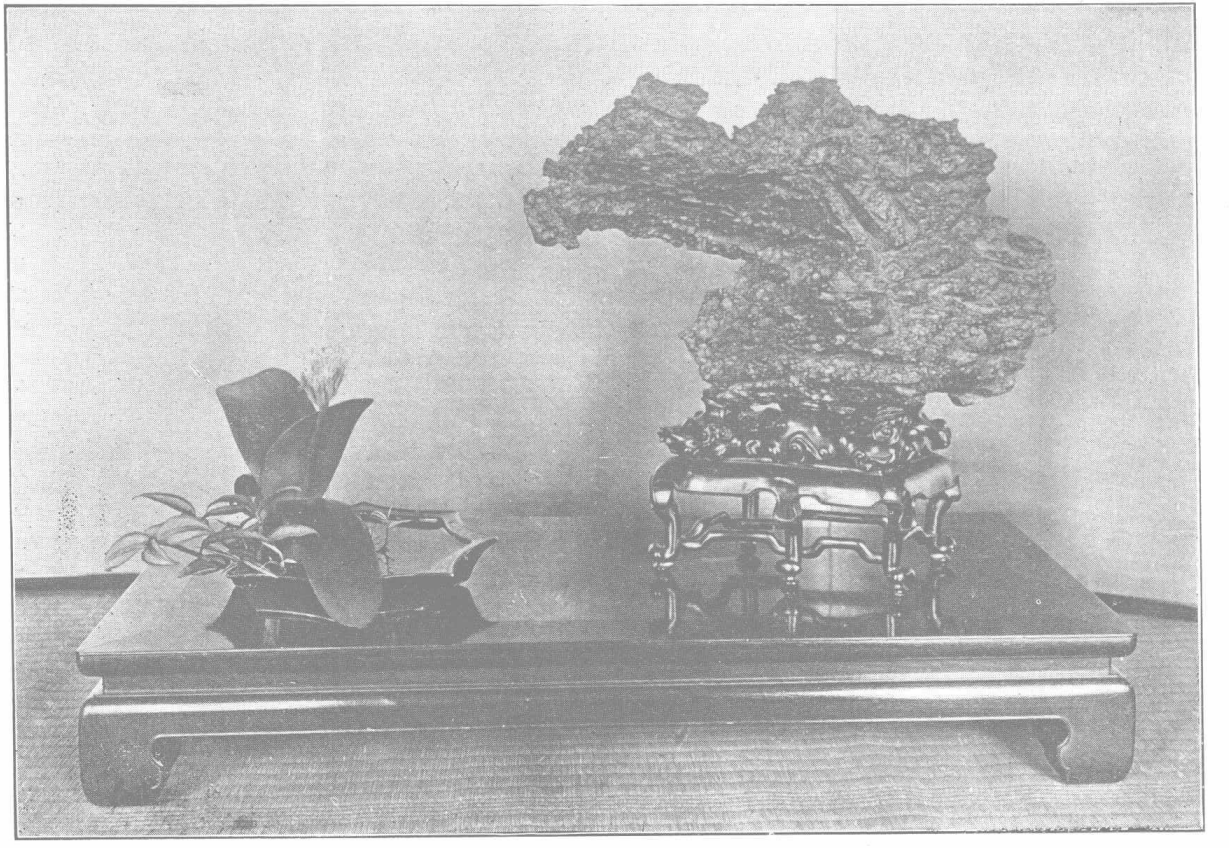
歐米婚儀用花束を日本化したるもの

白と桃色とのリボンの結目にスヾラン又は
ヒメユリの如き小花を点綴する

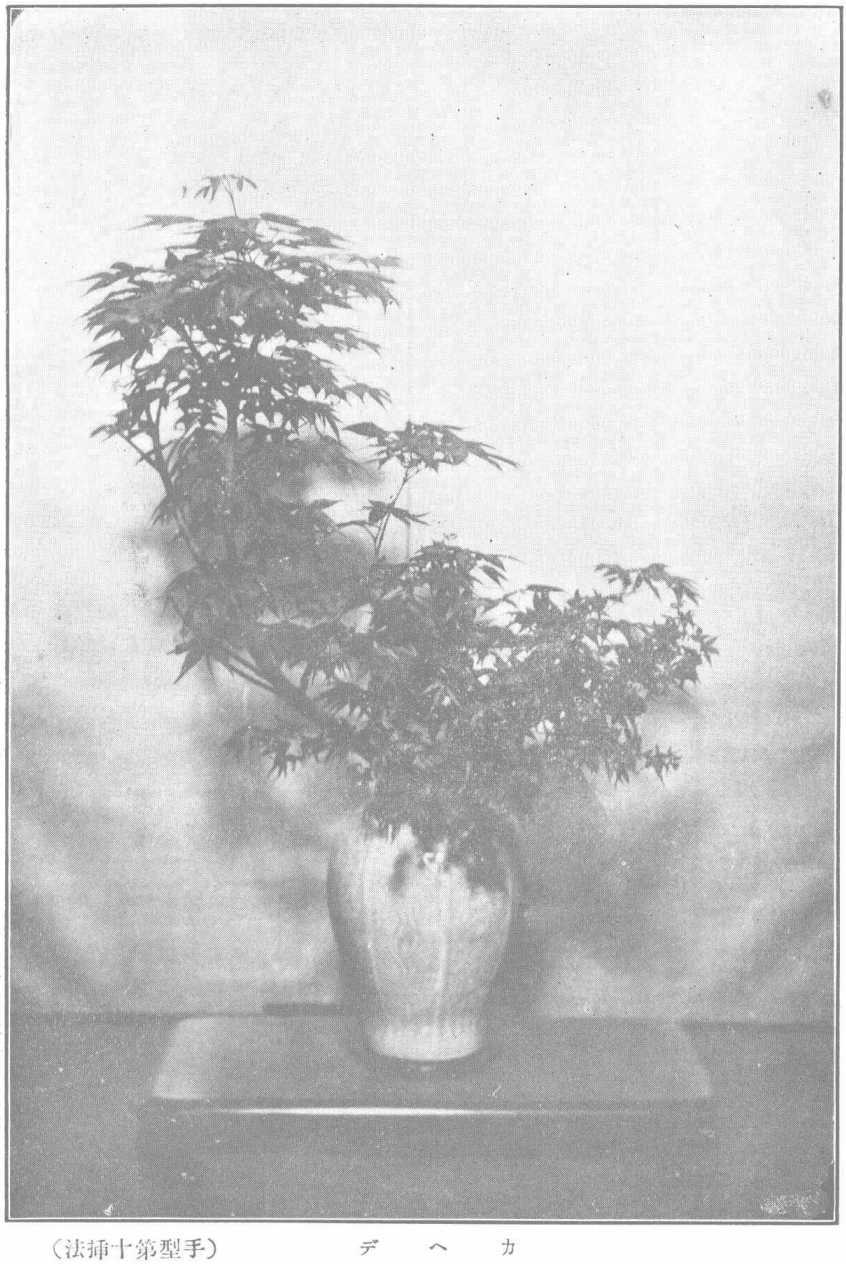
純美的本位の盛花



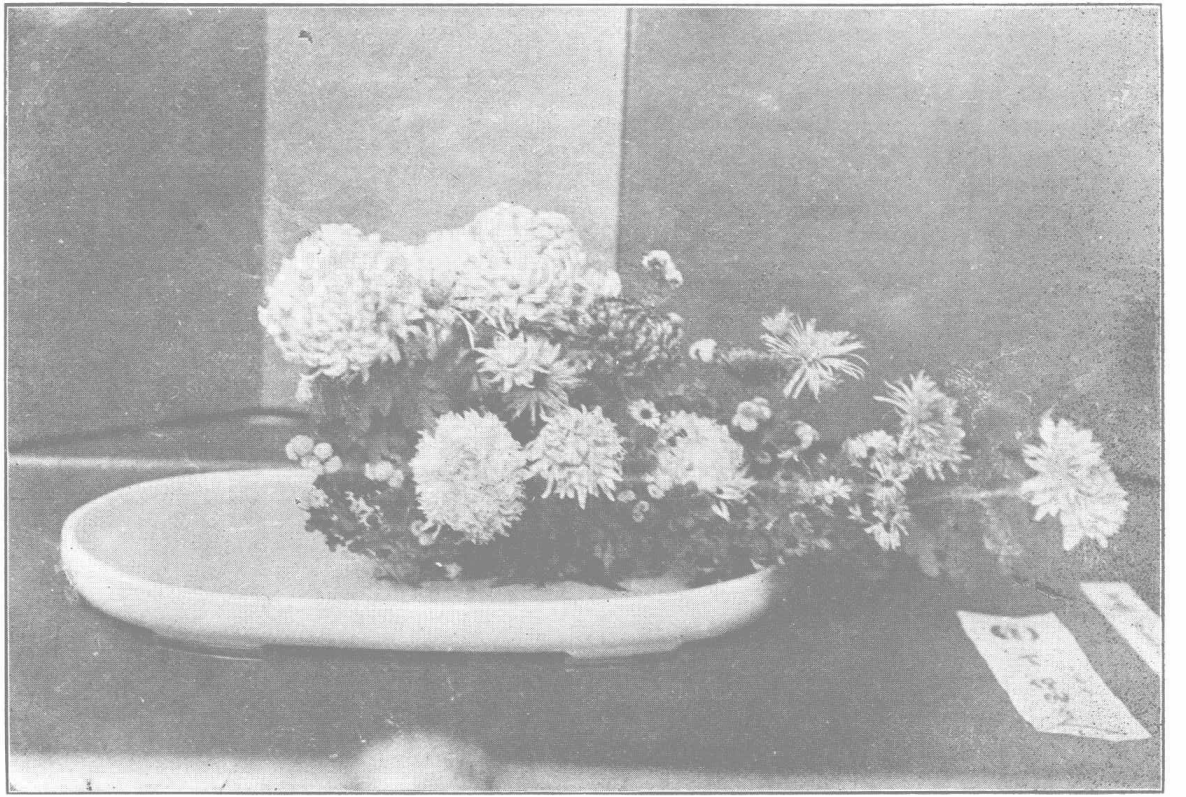
（草）リマテコ　（行）ンタポ　（眞）タバツキカ



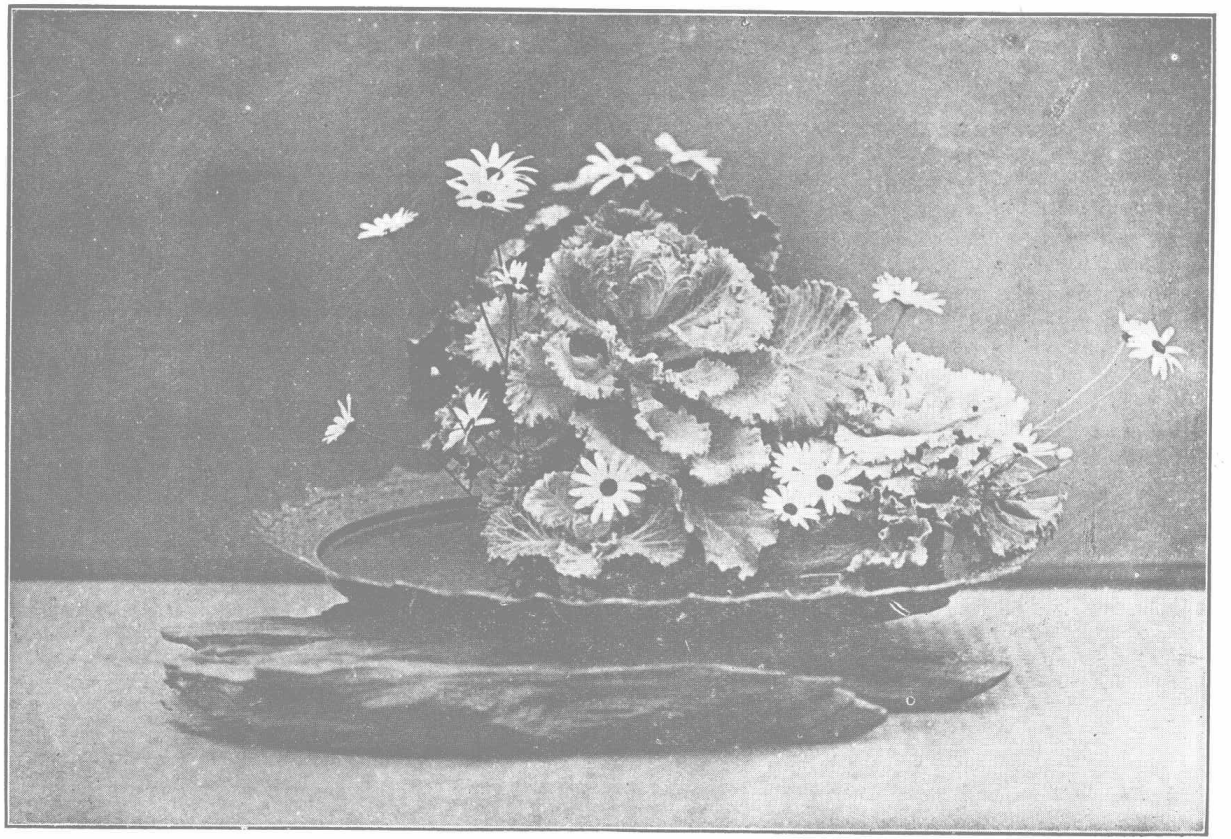
（法挿五第型手）　　（窯瑚珊那支）器　　ンラスユシ　　プユチンマイハ



（法挿十第型手）　　デ　ヘ　カ



（法挿二十第型手）　　（尺三磁自　器）　ク　　キ



(手型第十二挿法)　　ハポタン　マガリツト

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com